

紀伊半島、大いなる共和国的存在

紀伊半島の東の付け根、尾張河内とも呼ばれた伊勢長島で、一向門徒は信長の軍勢に対し、長いあいだ、ずっと踏ん張っていた。信長の本拠から目と鼻の先にありながら、信長はこれを陥とすのにたいそう苦勞した。西の付け根、大坂の石山本願寺でも、長年にわたって苦境を強いられていたし、信長にとって、紀伊半島の輪郭はいつまでも不明瞭なままで、

海と山の間^{あわい}から、不穩な者どもがこの権力者の外皮を侵すように染み込んできていた。戦いの勝利がなんら決定的な意味をもたない門徒との戦いを繰り返すたびに、虐殺の度は激しくなった。信長を主にみれば、この虐殺は彼自身の人格的苛烈に原因を求められようが、門徒を主にみれば、むしろ信長が虐殺以外に道を失っていく、つまり勝利と引き換えに人心を失い、門徒に翻弄される哀れな姿である。たしかに、織田氏は畿内のほとんどを制圧したかにみえるが、それは「領土」なる概念に囚われているかぎりでのことである。現実の畿内には、「領土」の概念をものともしない、門徒をはじめ、神仏に近しい変幻自在の存在がいたるところに蠢いていた。かくして信長は、やはり自身になかなか従わなかった高野山への出陣目前、明智光秀の謀反により本能寺に横死する。

秀吉が家康との戦いに集中できなかったのは、彼の本拠、大坂の目と鼻の先である和泉まで一向門徒が出張っていたからだ。大坂は本拠というより、最前線だったのだ。門徒は蹴散らせば終わりの集団ではない。あとからあとから湧いて出てきた。だから彼は、家康との戦いの大半をあまり出来のよくない甥に任せ、本人は紀州との戦いに時間を費やしていた。家康どころではなかった。秀吉にとって、天下分け目は小牧長久手ではない、紀伊半島なの

いわゆる長島一向一揆に対して、信長は大きくみて三度の侵攻を試みている。合戦のさなかに信長の庶兄信広、弟興長・秀成、一族の小瀬清長、織田信次、織田信直、織田信成、織田信昌、信長の義弟佐治信方（妻は信長の妹）、佐々松千代丸（成政の嫡男）、氏家ト全、林通政、平手久秀らが戦死し、一方の門徒側は女子供を含めて二万人が焼き殺されるなど（『信長記』、『年代記抄節』）、虐殺が発生した。

石山本願寺攻めの不手際により高野山に追放された信長の重臣、佐久間信盛の遺物を提供しなかったことなどを理由に、天正九年（一五八一）八月、信長は諸国の高野聖を捕縛し、安土城外、伊勢蛛津河原、京都七条河原にて、高野僧、宿^{やど}飯^{かりひじり}聖一、三八三人を斬殺している（『多聞院日記』ほか）。

天正十二年（一五八四）三月半ばから十一月半ばにわたる家康・織田信雄連合軍との合戦期間中、すくなくとも六、七、八、十月の大半を、根来・雑賀・粉河寺衆徒との対陣のため大坂に過^{すご}している。

だ。彼は大阪にいながらにして、家康との開戦後ただちに手を打った。まず、応仁の乱以後途絶えていた伊勢遷宮を復活させた。それからもうひとつ、手を打った。信長がついに踏み入れることのなかった高野山の高僧、木食^{もくじき}応^{おう}其^ぎの協力を得たことだ。本能寺の変は、高野山攻めの前夜に小田原弥勒堂に立てこもって彼の行なった怨敵信長調伏の結果（『高野春秋』とみてもよかった。その彼と手を結んだのだ。秀吉のみていたのは世俗の世界ではなく死者の世界だった。すなわち神の伊勢、旧仏教の高野山、新仏教の石山本願寺、畿内を横断する日本精神史上の重要拠点^{きょうてん}が秀吉の手によってひとつの線につながった。これで秀吉包囲網は反転、ひっくり返って紀伊半島の包囲が完成した。木食とともに、旧主信長がついに足を踏み入れることのできなかった紀伊を制圧したとき、秀吉はたいそう喜んだ。家康をおのれの足下に置いたときよりも、後北条氏を滅ぼしたときよりも、このときの喜びは大きかったように思われる。戦略的にいっても、熊野の制圧は家康や後北条氏、長宗我部氏をはじめとする東南海の諸勢力を分断し、さらには関東を見晴るかす、遠く奥州を視野に収めることができるからだ。以後、豊臣政権は伊勢遷宮、長谷寺の復興を手始めに、高野山、金峯山寺、そして熊野本宮に桃山文化の粹を集めて巨大な伽藍・神殿を築き上げた。関ヶ原以後、零^おちゆく豊臣家の足取りを追っていくと、京の方広寺大仏殿を拠点に、紀伊半島一帯を聖地化しようとする異様な、そして悲しい執念を感じることができる。

江戸時代、徳川氏は和歌山、桑名、尾張にもっとも有力な一族・家臣を置いた（そこに家光付の大番頭を城主に据えた、南大和の高取城も加えるべきだろう）。京と紀伊半島とを分断し、後者を太平洋の彼方に遠ざけるように。大坂の陣を経て豊臣家なきあと、徳川氏はこれを統治するよりもパージすることを選んだのである。幕末、天誅組が方広寺を出て高取城の奪取にこだわったのは、畿内に設けられた幕府の戦線を分断し、京と紀伊半島とをふたたびつなげることにあったのかもしれない。むろん、孝明天皇の吉野行幸は大きなきっかけではあるが、背後には平野国臣や真木和泉のような軍略家がいた。挙兵が戦略的な意図なしに行なわれた無謀とみるのも歴史に敬意を欠く。すくなくとも天誅組にとって、この戦線の分断、ひるがえって京と紀伊半島の接続は、天下の帰趨を決するものだったと考えてみては

家康との開戦から九日後、秀吉は伊勢の御師慶光院周養に宛てて、「わさと申候、いせ^{伊勢}御せん宮の事、すなハちおもひたち、まつ五千くわんの分に、きかね二百五十枚、うは^{上部貞永}へにわたし、やうたい申ふくめ候てつかハし候、よろつうは^{万上部}へとそのはうたんかう候て、よきやうにさた^{沙汰}あるへく候、なをくハしくかさねて申へく候、かしく、」との自筆書簡を送っている。

桑名に徳川四天王の本多忠勝（のちに家康の異父弟松平定勝）、尾張に家康の九男義直、和歌山に家康の十男頼宣。初代大和高取藩主は植村家政。大番頭は將軍家直属の武官（番方）筆頭。

どうだろうか。

神武東征を経て、壬申の乱、平安末期の三上皇の繰り返したおびただしい熊野御幸、後醍醐帝の吉野蟠踞にいたるまで、大和と紀伊の国境、すなわち世界第一級の断層の走る畿内の中央構造線断層帯は、古来、産霊むすひの神々の漏れ出す不穏な土地だった。戦国時代の三英雄のひとりである信長はこの地に入ることすら許されず、神国を語ることでようやく秀吉は入場を許され、そして家康はこの地を彼の入念に築きあげた封建国家から分離することに執心した。江戸時代、ひとが紀伊半島の南の彼方に補陀落の霊場を夢想したのは、この地が、近世封建国家の外部に置かれていたからだろうか。思えばルイス・フロイスは、この地を「大いなる共和国的存在」（『日本史』）と呼んでいた。

半島とアメリカ——中上健次の想像力

さて、紀伊半島をめぐるわたしの歴史的雑感について、学者はそのいちいちを個別に批判することができるだろう。物語を批判すること、歴史の連続性を断ち切ってバラバラの切片に変えること、それこそが実証であるのは、明治はじめのいわゆる「抹殺」史学以来、変わっていない。だが、問題は、われわれの社会が、中世後期から近代にいたる歴史を物語る力を持ち合わせていない点にある。記紀神話のもとより、平家物語や太平記のような水準の作物は見当たらない。物語を疑うのは簡単だが、批判すべき物語を欠いた場所でなされる実証主義ほど貧しいものはない。今日の学者は、物語化を禁じた家康の古い手管のうちで、それを無意識に模倣するにすぎない。学者にとって重要なのは領国や藩であり、そうすることで日本を切片化し、中近世の抑圧を再生産しているのである。だからいまはまだ、明治の志士さえやり残した物語化の蛮勇が必要とされている時代であるように思われる。要するに、分断されたままになっている土地をつなぐ精神上の旅が、必要とされている。

戦後最大の作家、中上健次はこんなことをいつていた。

「紀州もすごいかもしれないが、日本海だって波が荒いんだぜ、ここは入江になってるから感じが違うけど」

湾の右手に雪が光る山がみえた。

「朝鮮半島が見えるかもしれない」

富山の仲間にはわらった。海に向うにアメリカがあると思って育った人間と、朝鮮、中国があると思って育った人間とではどう違ってしまっただろうかと思っただけだった。眼をこ

『古事記』冒頭、天地開闢の際に登場する天之御中主、高御産巢日、神産巢日の三神は「造化三神」と呼ばれ、事物の生成を司るとされる。

実証主義を歴史に取り入れた近代黎明期の歴史学者は、太平記や忠臣蔵など、物語上の説話をつぎつぎに「正史」から除外し、ときに「抹殺博士」と呼ばれた。

らして見ていると水平線の向うに朝鮮半島がぼっかり顔を出す気がした。

「風景の貌」

富山湾の彼方の水平線に朝鮮半島をみる想像力と、紀州枯木灘の彼方の水平線にアメリカをみる想像力とは、似ているようで異なる。同じ革命といっても、福岡の頭山満の抱いた夢と、土佐の植木枝盛の抱いた夢と、あるいは佐渡の北一輝の夢と、土佐の幸徳秋水の夢とが異なっているように、それはちがう。もっと別のいいかたをすれば、われわれ日本人は北の海を経由して国家について学び、南の海を経由して革命について学んだ。そして決まっ
て、南の勢力は敗北した。たとえば幾世代にもわたって熊野御幸を繰り返して革命の力を蓄えてきたはずの上皇の一族は、ついに決起した承久の乱において、新たに登場した北の一族——北条氏——に敗れて灰燼に帰した。明治維新は稀有な例外にすぎない。革命の主体を担ったはずの南海の一派は西南戦争や自由民権運動を経て駆逐された。新首都に国家を建設するには、彼らは不都合な存在だった。以後、国家を志す者は朝鮮半島から満州へ向かい、革命を志す者は上海から東南アジアに向かった。のちの大東亜戦争は、そうした正反対の思惑の錯綜のなかで展開されることになるだろう。国家的なものと革命的なもののごたまぜ——これが大東亜戦争の本質かもしれない。

中上健次は一九四六年八月二日、和歌山県新宮市に生まれた。私生児だった。母が健次を妊娠しているあいだに、父は別の女を二人妊娠させていた。母は父と別れてひとりで健次を産んだ。二人の別の女は、父とのあいだにそれぞれ三人、一人の子を産んだ。ところで母には死別した前夫とのあいだにすでに四人の子があり、半分血の繋がった兄弟姉妹が八人いたわけである。母は末子の健次を連れて、すでに男子のひとりあった、土建業を営む別の男と結婚する。新しく兄となった十二歳上の男は、健次が十二歳のとき、自殺した。

被差別部落出身の健次は、自身の育った場所を「路地」と呼んでいた。「母方で言えば三男、父方で長男、戸籍上で長男、育った家庭では次男」という、彼をめぐる複雑怪奇な家系図と、「路地」は折り重なる。

『枯木灘』の主人公、竹村秋幸の実父は浜村龍造という。龍造の出自については次のように語られている。

その男龍造蠅の王が、秋幸の実父だった。その蠅の王の周りにはいつも、噂が立ちのぼっていた。大きな男だった。どこの馬の骨やら、と人は言った。或る時、こんな噂が流れた。熊野の有馬の土地に、浜村家先祖代々の碑をたて、元をただせば馬の骨などではさらさらなく、戦国の時代、織田信長の軍に破れた浜村孫一という武将が先祖である、と言いはじめた。人の失笑を買っていた。「金があれば御先祖様までええのんと取り換えできるんかいの」人は言った。「そんなことまでして、町の人の仲間入りをしたいんかいよ」一

度その碑を見てやろうと秋幸は思っていた。

秋幸の母フサは、その男のことを多くは語りたがらなかった。秋幸もまた聞きたくもなかった。親が誰であれ、どこの馬の骨であれ、それが二十六歳になった自分に何のかかわりがあるのか、と思った。「先祖がそれでどうしたんじゃ」と秋幸はわらった。

信長を追いつめ、そして自身も追いつめられた雑賀孫一をモデルとする浜村孫一の末裔——それが龍造である。先祖を金で買った男、イザナミの眠る、熊野灘を望む紀州有馬の地を卑劣な手口で買い占めた男、幾人もの女を孕ませているあいだに自由刑に処せられやがて刑務所から出てきたこの男が、秋幸の父だった。秋幸の名が幸徳秋水を思わせるものであることは、指摘するまでもない。

文芸評論家の柄谷行人は、健次が四十六で死んで十五年後に、彼について次のように語っていた。

僕は『近代文学の終り』という本を出した……こういう「終わり」は、突き詰めると、やはり「差異の消滅」ということにあると思います。差異とは、具体的にいえば、階級的差異、男女の差異、年齢（世代）の差異ですね。これが無くなると、パワーが無くなる。芸能や文学の栄光は、差別的な社会構造に基づいています。……小説でいえば、中上健次ですね。彼は桁外れのすごい作家でした。それは、彼がたんに知的に現代文学の先端を行っていたからではなく、彼の力の根源に、巨大な差異、つまり、差別の問題があったからだと思うのです。しかし、この差異は八〇年代になって、急激に衰えた。……もし差別が真に無くなるのなら、文学など無くていいい。

政治学者ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』の理屈から出ようとしない柄谷によれば、日本の国民国家形成を担ったのは、戦前日本の純文学という特異な「制度」だった。そして国民国家から取り残された紀州は部落の出身ゆえに、戦後も健次は純文学者たりえたのだと、国民国家形成の物語のなかに彼を回収する。柄谷にしてみれば、彼は国民国家を形成する文学という制度を、時代遅れに再現したにすぎない——歴史は繰り返す、一度目は悲劇として、二度目は笑劇として。つまり彼は、遅れてきたドン・キホーテ、サーカスの会場に遅刻してやってきたピエロなのだった。

中上「枯木灘」『全集』第三卷、二六一―二六二頁。

柄谷行人「可能なる人文学」『論座』一四二号、朝日新聞社、二〇〇七年三月、四三―四四頁。

アンダーソンによれば、近代国民国家は「imagined communities」である。国家の淵源に暴力装置の存在をみるマルクス主義的な理解とは対極的なもので、主としてメディアや教育による言語の均質化作用（方言をふくむ多様な俗語の公定語への変質）に注目しているが、柄谷はとくに文学者による言文一致運動を重視している。

しかし、わたしはアンダーソンにも柄谷にも与しない。実際には差異はなくなっていない——昨今の峻烈な世代間格差を考えてみればいい——のだから、文学の衰弱がたしかだとしても、差別の有無とは関係がない。だから、健次をはじめとする純文学者の魂を、国民国家形成の物語のような安い歌で鎮められるとは思われない。島崎藤村の『破戒』以来、路地の彼方にアメリカを夢見る純文学の想像力がどういうわけか国民国家形成と結びつくというヘーゲル弁証法的アクロバットは、アンダーソン以後生じた日本の知的雰囲気のおかげでしか通用しない。純文学は、むしろ閉じようとする国民国家に風穴を空けるものだ。固定した意味内容のうちに言語を硬直させるナショナリズムを攪乱し、言語を意味ではなく固有の出来事に昇華させるものだ。だから純文学は、国民国家やナショナリズムよりも、相対的に、大東亜共栄圏や、もっといえば大東亜戦争に近い。

健次は文学が戦争を求めていることを次のように語っていた。

文学は、戦争を欲している、と気づく事がある。敗戦後、三十三年経った今、現在である。かつて領土の拡張、利益衝突や経済の要求のため、戦争は渴望されたが、文学が自らの活性化の為戦争を欲している、と思う。…

戦争とは奇妙な物である。戦争に幾つかの種類がある。独立戦争、国家利益の衝突による戦争、侵略戦争、革命やクーデターをも戦争と呼んでよい。戦後三十三年目になって、新世代の小説家らの無自覚の作品が、どの種類の戦争か分からぬが、巫女が招魂をするように戦争というある熱のかたまりを手招きしはじめているのである。

「戦争を欲する子供たち」

文学は国家よりも、戦争に似ている。

愚者の文学——大石誠之助

私生児か嫡出子かのちがいは、そのことに拘泥する精神の持ち主でないならば、婚姻という国家の認めた制度にしかない。グロテスクに入り組んだ路地のような家系図から離れて彼らを眺めてみれば、けっきょくのところは誰もが私生児、すなわち Natural Son である。人間の動物としての自然な出生を国家的制度で色分けしているにすぎず、嫡出子とは私生児の対義語というより、私生児という大海に流れ込んだ小川の淡水にすぎない。いずれは溶け合い、区別はなくなってしまう。

『全集』第一四巻、三九五頁。

英語で私生児は Natural Son という。たとえばシェークスピアは、『リア王』の私生児エドモンドに「おお自然、お前こそわが女神、俺はお前の掟に従う」、「われら私生児は自然の精気に満ちた秘め事のなかで生まれ、強い肉体と激しい気性とを授かった」、「けだるく退屈で疲れた寝床で生まれた」嫡子エドガーより優れている、などと語らせている。

かつて柳田國男は日本人の先祖観について、中国のそれと比較しながら、ほとんどの日本人がせいぜい三、四世代前までしか遡れないことを指摘する一方で、日本人の先祖崇拜の厚さを賞賛してもいた。この柳田のアンビヴァレンスを尊重するなら、日本人の先祖は、三、四世代も経てば、神というほかない混沌のうちに溶解してしまうということだ。

『枯木灘』を読み進めるにつれて、家系図が必要ないことに思い至る。スクナヒコナのごとく、記紀神話に出し抜けにあらわれる産霊むすひの神を親とする神々 は、おそらく『私生児』

を意味するとわたしは考えているが、浜村龍造とは『自然』の別の名であり、あるいは中央構造線断層帯から紀州に降りてきた現代のタカミムスヒととってもいい。健次は次第に「路地」の主題から離れ、むしろ海に活路を求めようになる。むろん、それは補陀落を求める死出の旅であって、アメリカを夢見る敗者の旅でもある。

アメリカを旅した幸徳秋水は、マルキシストからアナキストになって帰ってきた。その彼を、大石誠之助が新宮に招いた。彼らはいまもまだある割烹料理屋養老館で酒を飲み、そして海老すくいをしようと熊野川に船を浮かべた。そこで交わした「爆裂弾」についての会話により、彼らは検挙されることになる。いわゆる大逆事件である。

問題となっていたのは、幸徳が主張していた「直接行動」である。一般にはストライキや小作争議などを指すが、暗黙に、暴力をとまなう革命が射程に入っている。この概念について、彼はこういつている。

即ち私共が革命というのは、甲の主権者が乙の主権者に代るとか、丙の優良な個人若くは党派が、丁の個人若くは党派に代って、政権を握るというのではなく、旧来の制度組織が朽廃衰弊の極、崩壊し去って、新たな社会組織が起り来るの作用をいうので、社会進化の過程の大段落を表示する言葉です、故に厳正な意味に於ては、革命は自然に起り来る者で、一個人や一党派で起し得る者ではありません。

「革命は自然に起り来るの作用をいふ」ともいう。革命の主体である「自然」がなにを意味するのか、また「自然」が革命をもたらすにもかかわらず、なぜ「運動」の必要があるのか、理解するのは容易ではない。

人間が活物、社会が活物で常に変動進歩して已まざる以上は、万古不易の制度組織はあ

るべき筈はない、必ずや時と共に進歩改新せられねばならぬ、其進歩改新の小段落が改良
たとえばスクナヒコナの親は神産巢日神であり、ニニギの母栲幡たくはたちむめのみこと千千姫命の親は高御産巢日神とされる。

幸徳秋水「獄中から三弁護人宛の陳弁書」『幸徳秋水全集』第六卷、明治文献、一九六八年、五二六頁。

或は改革で、大段落が革命と名けられるので、我々は此社会の枯死衰亡を防ぐ為めには常に新主義新思想を鼓吹すること、即ち革命運動の必要があると信ずるのです。

革命運動とは、「新主義新思想を鼓吹すること」であるという。肩透かしを食らうような彼の発言が嘘でないならば、革命とはもっぱら言語上の問題であるはずなのだ。言語と自然とが折り重なる場所で、彼は革命を夢想していた。この点で気になるのは、新宮出身の佐藤春夫が、次のように語っていたことである。

当時、一般には「文学上の」自然主義と社会主義とをほとんど同じもののように誤解していた。

だから、幸徳がいかに直接行動の概念を厳密に言語の範囲内に抑え込んだとしても、それで革命の主体ではないと自己を弁護できるわけではなかった。なぜなら文学上の運動と社会運動とが奇妙に重なり合っている言説空間において、彼がやはり、革命を目論む首謀者であることにかわりはないからだ。だから、もし真に自分を弁護しようとするなら、彼は言語の運動と現実の運動とは別のものであることを語り、そしてなおかつ自分はただ鉤括弧付きの「革命」を口にしただけで、現実の革命とは無関係だといわねばならなかった、鉤括弧付きの用語法に泥んだ大学の研究者のように。だが、そう語ることが、言語によって現実を変える力を失わせることでもある。それは幸徳の本意だろうか？ また反対に、そんなことは可能なのだろうか？——言葉を鉤括弧のうちに封印し、現実に対するあらゆる作用を禁じることが？

新宮の大石誠之助が五年にわたるアメリカ留学から帰ってきたのは一八九五年のことである。翌年には病院を開業し、また甥の西村伊作とともに洋食屋「太平洋食堂」をつくった。医者として、民衆の家庭改良を願うてのことである。中上健次が、義理の祖母の話として、誠之助の逸話を記している。

大石ドクトルの拘引、処刑は、町の人間に大きな衝撃だった。その当時の町の人間にとっては、大逆などという事はあつてはならない事だった。マルクス主義も、無政府主義も、分らない。大それた事をした人がお上の手で引っぱられて行つた。その人は、医療費を払えぬ貧乏人に、言葉にして「金がない」と言うには羞かしいだろうから、硝子窓を三回トントントンと叩いて合図しろ、と教え、そうすればただで貧乏人を診察した人だった。

私が、大逆事件の、大石誠之助を、歴史の人間でなく生きた血の通った人間として思い描けるのは、そのトントントンと硝子窓を叩くエピソードによる。義父の母親、私から言

同前、五三一頁。

佐藤春夫「詩文半世紀」『定本佐藤春夫全集』第一八巻、臨川書店、二〇〇〇年、三一頁。九頁に大石誠之助と自然主義をめぐる興味深い挿話がある。

えば義理の祖母が、そうやって硝子窓を叩いて、診察してもらった。

「私の中の日本人」

トントントン——沈黙の合図に民衆の声なき声を聞いた彼の旺盛な活動は、すこしずつ、社会主義運動に近づいていった。そして一九一〇年五月、幸徳とともに彼は検挙された。彼はおのれを次のように弁護している。

私は社会主義や無政府主義に対し、理想と実行とを全く別々に離して考えて居りました。従ってこれを鼓吹するについても、公開の談話会や演説で述べたり、新聞雑誌へ寄書した外に、かつて実行の方面に手をつけたことはありません。そうしてその主張というのは、遠き遠き将来に起るべき、取り止めもつかぬような理想——寧ろ空想——であって、今日では自分の一身一家についても決して実行のすることではないのです。

ここには、幸徳の弁護のような不思議はない。言葉はどこまでも言葉であり、現実はどこまでも現実である。弁証法の余地などはなく、言葉と現実とのあいだには、越えがたい境界線が横たわっている。

しかし、同じ誠之助が絞首台のうえで「偽^{うそ}より出でし真^{まこと}実なり」と語ったとすれば、話は異なってくる。今際の際の彼の口から漏れたこの言葉は、簡単に通り過ぎていいものではない。現実に対してはつねに嘘でしかない言葉が、現実を言い当ててしまうことがある。ひとは我知らず、思いがけず真理を語ってしまうことがある。というよりも、言葉が現実に生成してしまうことがある。舟遊びの最中、戯れに発したにすぎない「爆裂弾」の言葉が、現実には国家を動かし、天皇暗殺を企てたテロリストとしておのれを処刑に至らしめる、という。奇妙にも、ただ言葉だけのものであるはずのものが、事実^{じじつ}に生成したのだ。国家主義者によるでっち上げという安い陰謀論とは異なる、もっと深い問いかけが、誠之助の言葉には含まれている。そもそも言葉は人間のもののなのだろうか？ もしかすると言葉は、それを語る主体の所有物ではなく、もっぱら《自然》のものなのではないだろうか？

佐藤春夫は彼のために「愚者の死」といわれる一編の悲しい詩を残した。

千九百十一年一月二十三日

大石誠之助は殺されたり。

げに厳粛なる多数者の規約を

『全集』第一四巻、三七〇頁。

大石誠之助「社会主義と無政府主義について」（塩田庄兵衛・渡辺順三編『秘録大逆事件』下巻、春秋社、一九五九年）一八四―一八五頁。

裏切る者は殺さるべきかな。

死を賭して遊戯を思ひ、
民俗の歴史を知らず、

日本人ならざる者

愚なる者は殺されたり。

「偽うそより出でし真実まことなり」と

絞首台上の一語その愚を極む。

われの郷里は紀州新宮。

渠かれの郷里もわれの町。

聞く、渠が郷里にして、わが郷里なる

紀州新宮の町は恐懼きょうくせりと。

うべさかしかる商人あきうどの町は嘆かん、

——町民は慎めよ。

教師らは国の歴史を更にまた説けよ。

賢者は言葉の限界を語りたがる。反対に「愚者」とは、言葉の力を信じる者のことだ。「力」とは自然の、とりわけ物体の論理に属するものであって、精神の論理に属す言葉とは対極にある。言葉は、その本質にしたがって、無力でなければならない。だから《言葉の力》を妄信する者には、「愚者」の名がふさわしい。

しかしそのことによって、大石誠之助は、純文学の核心に触れる。佐藤春夫は彼を「日本人ならざる者」といい、中上健次は「私の中の日本人」と呼んだ。日本の国民のために日本の国家を打倒する、革命という概念、近代人には耳慣れたものだが、すこし考えてみれば不条理な矛盾を強いるこの概念の真っ只中で生きること、それは純文学においても同様である。日本語で書かれた同じ言葉を用いる者でありながら、しかしどこまでも書き手にだけ可

能な孤独な文体を実現できなければならないからだ。

自由の文学——西村伊作

アブラハムの子イサクにちなんだ名付けられた西村伊作は、大石誠之助の兄、余平の子である。一八九一年の濃尾地震の際、余平は妻のふゆとともに、美普教会の煙突の下敷きになって死んだ。伊作七歳の出来事である。伊作は母方の西村家に引き取られた。西村家は奈良県下北山村の山林王であり、跡継ぎの途絶えた家の当主となって莫大な財産を得た。大逆事件の報はアメリカで聞いた。叔父の刑死に精神的よりどころを失った自分もまた、社会主義者として当局から睨まれていることを知った。だが彼の、日本人の生活改良の熱意はつづいた。建築家として郷里の新宮に、いまでも西村記念館として残る自邸を建てた。そこに画家の石井柏亭や陶芸家の富本憲吉を招き、与謝野鉄幹・晶子夫妻を招き、有島武郎や生田長江、同郷の佐藤春夫らを招いた。与謝野夫妻、堺利彦、沖野岩三郎を顧問に「西村芸術生活所」を開設、当時の学校令に縛られるのがいやで、独自に文化学院を創立した。教師には上記のほか、芥川龍之介や川端康成、小林秀雄から、山田耕筰のような音楽家、吉野作造のような法学者まで招いた。いまでも熊野速玉大社のそばに残る佐藤春夫の邸宅を、大杉栄・伊藤野枝と仲のよかった弟の大石七分しちぶんに建てさせた。

文学者と社会運動家が紀州を起点に複雑に絡みあっていた。文学と政治とを区別し、あるいは言葉と現実とを区別する常識家には理解しがたい、国家にとってはあまりに不穏な、そして不吉な場所が紀州だった。紀州は、近代においても依然として、ルイス・フロイスのいう「大いなる共和的存在」だったのである。

少年時代から伊作と付き合いのあった佐藤春夫は、彼についてこんな逸話を語っている。

この人はまことに楽しく上手に語る人で、特にその身の上話が面白いが、広島の中学校で制服というバカゲたものにあいそをつかしアメリカへ渡って勉強することを思い立って、アメリカへ行ったら、アメリカ人が「お前は何者か、クリスチャンか、ナシヨナリストかソシアリストか」などと問うから一語「自由思想家さ(オンリー・フリー・シンカー)」と答えてやったというが、この一語こそ彼の自画像の最も簡略に正確な素描であろう。何らの権威にも煩わされず思う存分、我儘勝手にそうして長生きをしたのがわが伊作さんである。

I am only a freethinker——。賢者はいうだろう、キリスト神も、ネーション国家も、ソサイエティ社会もなしに、言葉

が可能だというのか？ アメリカ人の疑念は欠伸が出るほど正当だ。すなわち伊作もまた、愚者である。「主義」や「思想」のレッテルを貼りたがる世間に対して、彼のいう裸の自由は、おそらくこの概念が世界において占めている、もっとも深いところから吐き出された嘆息である。神も国家も社会も尽き果てた場所、イザナミの墓——神の死——を戴く紀伊半島の尖端で、日本人はもっとも自由に——愚者の自由を——思考する。太平洋に突き出した紀伊半島は、島崎藤村や志賀直哉のような偉大な個人の居場所をのぞけば、近代文学発祥の地のひとつであり、そして近代革命の端緒を切り開いた土地でもあった。国民国家の形成とはなんら関係しない、想像力のおよばぬ、はるか彼方の絶海に、近代文学は生成する。

半島の神

中上健次は、西村伊作が叔父の大石誠之助について語った次の言葉に、格別の興味を示していた。

文化学院の創立者である西村伊作は、このように書いている。「彼は元来、宗教を全然信じなかった。宗教というものは軽べつするような点もあったが、自分が拘留されて死刑に処せられるということがわかったときに、彼は自分とイエス＝キリストを比較して見て、自分もキリストのような運命を持つのだと思つたらしい」理不尽な死に際して、獄中で聖書を読みながらなお宗教を信じない大石が、では何を信じていたのだろう。私はその大石に興味がある。

また別のところではこうもいつていた。

半島ではほどほど、中庸がない。なにかもむき出しである。貧困は貧困のまま、自然的自然の帰結である差別は差別のまま、被差別は被差別のまま。半島を車で走り、風景を眼にする私には、美しさそのものもむき出しに映る。その杉木立が日に当たっている風景、溪流の水が岩にしぶきを上げ、紅葉の始まった樹木がある風景がちょっとならまだよい。どこを見ても、どこを切り取って額に入れても美しい絵になる美しい風景は、私の眼には美しさを超えて別の物に映るのである。

風景は風景という枠組を越え、自然は自然という枠組を越え、宗教のようなとしか言いようのない感情を人の心にもたらず。その事物の氾濫美しさの氾濫を統^すべる物は何もない。輪郭が溶け、岩の内実、日に当る草々の内実が入り混じったように見える風景は、こ

ここでは日の当って輝いただけの闇だとしか言いようがない。天地あめつちが分かっていらい書き言葉、詞はことばによつて治めた天皇すめらぎの都が、けつして紀伊半島の中ではなく、大和・京都だったことが理解できる。

ものを見る人間に、半島は本質として無政府である。

「美しさを超えて映る半島」

半島は国民国家の臨界にある。半島は、海と山のあいだにあって、なかば国家であり、なかば海である。地球上を国民国家が埋め尽くしたかにみえる近代にあって、島でも本土でもない半島は数少ない外部ぐわいぶである。これまで述べてきたとおり、純文学は「風景」とも、「日本的自然じねん」ともかかわりのないものであることは、健次もわかっている。いまわたしが問題にしたいのは、無政府の半島にあらわれた宗教的なものの意味である。それは健次が「天皇の都」という言葉で代表させている神とは、おそらく別のものだ。

なぜ、上皇の一族は異常な熱意でもつて、熊野を求めたのか。なぜ、秀吉は俗世で最強を決する家康との戦いよりも、紀州を優先させたのか。玉座の天皇を否定したとて宗教的なものがなくなるわけではないし、また宗教を否定したとて、イエス・キリストがいなくなるわけでもない。玉座の天皇を否定したとて日本がなくなるわけではないが、玉座の天皇だけが天皇というわけでもない。半島は、死んだ母神、イザナミを求めて、都を追われたスサノオが流離きずらう場所でもある。高天原の神を否定したとて、葦原中津国の神々まで一掃できるわけでもなかった。

夜見国の入り口のひとつである熊野灘の向こうにアメリカを想像しながら、ふと、こんな問いが脳裏に浮かぶ——日本の一番深い場所に存在しているのは、天皇の歴史なのか、それとも民衆の歴史なのか。二つの選択肢は、試みに答えようとする者をためらわせるほど、意外によく似た表情をしている。

紙幅も尽きようとしている。はたしてこの根源的な問いに答えるには、あまりに準備不十分だが、すくなくともこれだけはいえる。

半島は、国民国家の臨界にあって、旅人をそんな不思議な問いに誘う場所だ、と。